

## 中部山岳域におけるハイマツを食害するハバチ類の生態と年次変動

古屋諒・斉藤雄太・中村寛志（信州大学農学部 AFC）

ハバチ類による食害はハイマツの枯損要因の一つとして挙げられ、風障害などの環境要因とも密接に関係している。ハイマツを食害するハバチ類に関する研究は北海道で多く行われていた。本州では2001年から木曾駒ヶ岳でハイマツを加害するハバチが大発生していることが確認され、その後の調査で、このハイマツを加害するハバチとしてタカネヒラタハバチ *Cephalcia variegata* とマツハバチの一種 *Gilpinia* sp. であることが明らかになった。しかし、*Gilpinia* sp. は種まで同定するには到っていない。また、*Gilpinia* sp. は北岳においてもハイマツを食害していることが確認された。しかしながら、中部山岳地帯のハイマツを食害するハバチに関する研究は非常に少ないのが現状である。

本研究は中部山岳域(北アルプス、中央アルプス、南アルプス)において、タカネヒラタハバチと *Gilpinia* sp. の分布状況の把握し、いまだ不明な点の多い2種のハバチ類の生態的知見を得る事を目的として行った。

調査地は以前から継続している中央アルプスの中岳と、南アルプスの北岳～中白根山に加え、北アルプスの常念岳～蝶ヶ岳を設定した。調査項目は、GPS (GARMIN GPSMAP 60CSx) を用いたタカネヒラタハバチと *Gilpinia* sp. が発生している場所のマーク、個体数のカウント、被害程度などである。その結果、2011年に北アルプスの常念岳と蝶ヶ岳で初めてハバチ2種の分布が確認された。一方、中央アルプスと南アルプスで生息している *Gilpinia* sp. の個体数は2005年の調査よりも減少した。中央アルプスでは、*Gilpinia* sp. の大発生が収斂してきたと言える。一方、南アルプスでは、*Gilpinia* sp. の代わりにタカネヒラタハバチの大発生が見られた。2005～2011年の間に、ハイマツを食害するハバチの優占種が *Gilpinia* sp. からタカネヒラタハバチに変わったことが分かった。これは両種間で、餌資源をめぐる競争があったのか、単なる発生周期のずれによるものかは今後の研究の課題である。

本年度も同様の調査を行った結果、ハバチ2種の分布域と個体数が両種共に減少する傾向がみられた。原因は依然として不明のままであるが、ハバチ2種の減少が中部山岳域全体で起こったため、仮定として気象による原因が考えられる。飼育による実験である程度の要因がつかめるかもしれない。今回は2005、2011、2012年の3回にわたる調査によって判明したハバチ2種の個体数変動の傾向と分布エリアの変化を述べる。また、観察によるハバチ2種の生態に関する知見もあわせて報告する。



*Gilpinia* sp. 成虫のオス (2006年7月3日)



*Gilpinia* sp. の集団幼虫 (2011年8月28日)